

北アリゾナ大学共創教育プログラムの構築と導入期教育効果の実証

山田 知沙^{A)}, 松永 愛^{B)}

総合技術部技術企画課^{A)}, 工学部総務企画課^{B)}

1 はじめに

山口大学工学部附属工学教育研究センターは、2012 年度に文部科学省の「経済社会を牽引するグローバル人材育成事業」に採択され、その後、21 か国 50 機関で 1,127 人の学生が参加してきた。これまで、工学部の学生に特化した海外研修の企画、運営、実施に携わってきた経験をもとに、工学部総務企画係からの依頼を受け、本学が第四期中期目標・中期計画期間に拡大を掲げる共創教育プログラムの一環として、全学生を対象に実施を目指した北アリゾナ大学との短期語学研修の立ち上げに協力した。共創教育プログラムとは、異なる国や文化的背景、専門性を有する教育機関や学生同士が、対等な立場で協働しながら学び合い、相互に高め合うことを目的とした教育の枠組みである。従来の一方向的な研修や受け入れ型の国際交流とは異なり、双方が主体的に関与し、知識・経験・価値観を共有しながら、新たな学びや気づきを共に創出する点が特徴である。これは、北アリゾナ大学国際教育センターのシニアコーディネーターが本学工学部を訪問したのがきっかけである。この訪問を契機に語学研修の可能性について協議が始まり、1 年以上の調整期間を経て、最終的に現地の学生との協働が可能なワークショップや、実際に行われている授業の聴講などを含む多様な価値観を学ぶプログラムが具体化された。

2 プログラム実施概要と内容

本プログラムは、事前・現地・事後の各段階で構成された語学研修と異文化体験を組み合わせたものである。以下のスケジュールで実施された。

事前オンライン研修: 令和 7 年 2 月 10 日～2 月 20 日 (10 日間)

現地研修: 令和 7 年 2 月 21 日～3 月 8 日 (16 日間)

事後オンライン研修: 令和 7 年 3 月 12 日～3 月 18 日 (6 日間)

研修の基礎となる英語学習については、オンラインでの語学研修を 1 回 1 時間、全 16 回実施したほか、現地では 1 回 2 時間のセッションを計 12 回行った。語学力の向上に加え、現地での生活や英語でのやりとりに慣れることを目的とした内容で構成された。

現地研修では、北アリゾナ大学で実際に開講されている授業を聴講する Class shadow を最大 3 回行い、アメリカの大学における教育環境や授業スタイルを実際に体験する機会を設けた。これにより、参加学生が異なる教育文化への理解を深めるとともに、自らの学びを振り返る契機となった。また、同大学の IGP (Interdisciplinary Global Programs) に所属する学生と合同で行うワークショップを全 5 回実施した。グループディスカッションやテーマ発表を通して、異なるバックグラウンドを持つ学生間での相互理解を促進し、異文化間コミュニケーションを体験的に学ぶ機会となった。最初は緊張していた学生も、次第に発言に対する前向きな姿勢と意欲の向上が窺え、ワークショップ後には「もっと話してみたい」といった前向きな声が多く聞かれた。渡米後、IGP の学生と早期の接点があり、期間中も継続的に関わる機会が設けられただけでなく、授業外での交流も学生間で主体的に行われていたため、学生の積極性や英語への意欲に顕著な変化が見られたと感じる。加えて、日本語学科との連携において、山口大学の学生が日本語を学ぶ学生に対して、易しい日本語で山口を紹介するプレゼンを行い、ディスカッションのサポートを行う機会もあり、自身の英語力の向上を目的とするだけでなく、現地の学生の学びに貢献する機会を得、相互理解を深めることができたと考える。

さらに、以下のような文化・地域理解を目的とした活動も盛り込まれた:

- ・大学スポーツ試合観戦
- ・アフリカナイトへの参加
- ・グランドキャニオン、セドナの自然環境の見学
- ・ローウェル天文台の訪問
- ・フラッグスタッフの「ファースト・フライデー・アートウォーク」への参加(悪天候により中止)
- ・メジャーリーグ野球のスプリングキャンプ試合観戦

これらの活動は計6回にわたり実施され、地域の文化や自然に直接触れる貴重な経験となった。いくつかの活動には IGP の学生も同行しており、日常的な英語での交流が生まれる場面も多く見られた。

その他、ウェルカムレセプション、キャンパスツアー、北アリゾナ大学の関係施設訪問、クロージングセレモニーなど、プログラム全体を通じて多様な角度からの学びと交流の機会が提供された。

3 プログラム広報

プログラムの広報には Canva を活用し、リーフレット、パンフレット、プロモーション動画、ポスターを作成した。円安や物価高の影響を受ける中で、既に確立されている4か国5プログラムと並ぶ教育効果の高い語学研修として、学生に有力な選択肢として提示するには、本プログラムの特徴を端的かつ効果的に周知する必要がある。本プログラムは、共創教育の構築を見据えた語学研修であり、語学力の向上に加え、異文化理解の深化、現地学生との交流を通じた国際的視野の醸成、ならびに実践的な英語運用能力の習得を重視している。そのため、これらの特色を的確かつ簡潔に伝え、学生の関心を効果的に喚起する広報内容となるよう工夫した。



図1. 北アリゾナ大学プロモーション動画 QR コード



図2. 北アリゾナ大学プロモーションパンフレット表紙



図3. 北アリゾナ大学プロモーションポスター

4 プログラムの教育効果の検証(導入期)

海外留学支援制度(協定派遣)JASSO の留学前・留学後アンケートを比較し、本プログラムに参加した学生の留学前と留学後の満足度、学習効果及び意識の変化についてレーダーチャートを用いて分析し、全体の傾向をまとめた。ただし、調査の対象としたのは、参加者7名のうち、JASSOの受給対象者となった工学部及び創成科学研究科の学生5名である。また、交換留学との接続と展望、共創教育プログラムとしての効果についても考察した。回答項目を以下に示す。

1. 自分からやるべき課題を見つけて率先して取り組むことができる
2. 仲間に働きかけ、問題点を一緒に改善するために行動することができる
3. 自ら目標を設定し、失敗を恐れず粘り強く行動することができる
4. 自分なりに現状分析して課題点を具体的に提示することができる
5. 課題に向けた解決プロセスを考え、計画的に実行することができる
6. 既存の発想にとらわれず、課題に対して新しい考えで、意見やアイデアを工夫して提案できる
7. 自分の意見をわかりやすく整理した上で、相手に理解してもらえるよう的確に伝えることができる
8. 相手の話しやすい環境を作り、適切な意見を引き出すことができる
9. 自分の意見ややり方に固執せず、相手の意見や立場を尊重して柔軟に対応できる
10. チームで仕事をするとき、自分と周囲の人々や物事との関係性を理解することができる
11. その場のルールや手続きに従って、自ら行動や発言を適切にすることができる
12. ストレス状況に置かれても、自分の成長機会だとポジティブに捉え、前向きに対処することができる
13. 自分の文化背景の異なる場所また仲間とでも、リーダーシップを取ることができる
14. リスクがあっても、挑戦してみることが大切だと考え、実行することができる
15. 不十分な外国語力であっても、何とか意味を伝えようと積極的に発信することができる
16. 自分とは異なる信仰や文化的背景を持っている人を理解し、受入れることができる
17. 国内・海外を含めて、外国人との交流がある
18. 専門分野の勉強へのモチベーションがある
19. 語学の勉強へのモチベーションがある
20. 留学先の社会・習慣・文化に関する知識がある
21. 政治・社会問題・国際関係について、知識・関心がある
22. 社会での男女共同参画(男女平等)の重要性を認識している
23. 将来の方向性・進路について、明確な考えを持っている

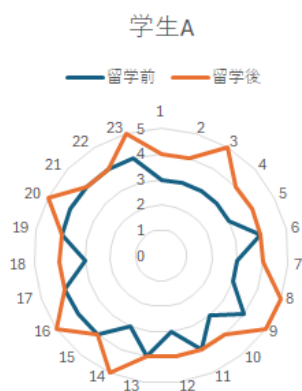


図1. 学生Aの回答

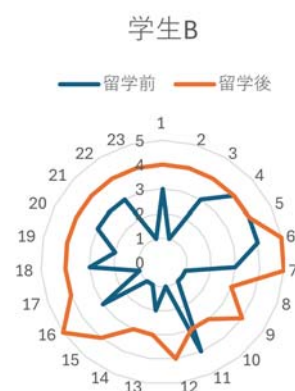


図2. 学生Bの回答

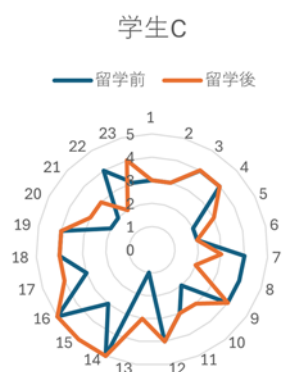


図3. 学生Cの回答

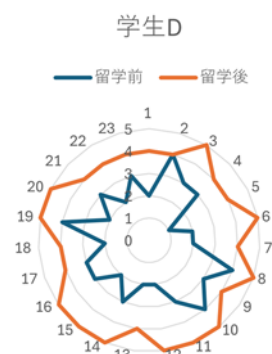


図4. 学生Dの回答

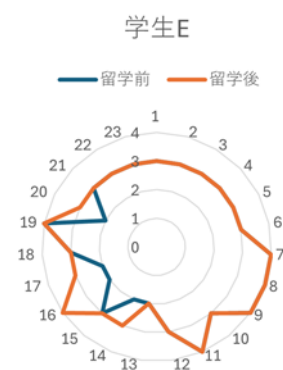


図5. 学生Eの回答

回答の種類

1. そう思わない
2. どちらともいえない
3. 少しそう思う
4. かなりそう思う
5. 強くそう思う

4.1 自律性と積極性の向上

多くの学生が「自分からやるべき課題を見つけて率先して取り組むことができる」(項目1)や「自ら目標を設定し、失敗を恐れず粘り強く行動することができる」(項目3)において、留学後に高い評価を示した。よって、異文化環境での生活が学生の自律性と積極性を高める効果があると考えられる。

4.2 コミュニケーション能力の向上

「自分の意見をわかりやすく整理した上で、相手に理解してもらえるように伝えることができる」(項目7)や「不十分な外国語力であっても、何とか意味を伝えようと積極的に発信することができる」(項目15)においても、留学後に大きな向上が見られた。これにより、学生が異文化コミュニケーション能力を実践的に向上させたことがわかる。

4.3 異文化理解と受容

「自分とは異なる信仰や文化的背景を持っている人を理解し、受入れることができる」(項目16)や「留学先の社会・習慣・文化に関する知識がある」(項目20)においても、留学後に高い評価が見られた。よって、異文化体験が学生の異文化理解と受容能力を高める効果があることを示していると言える。

5 成果と今後の課題

本プログラムへの参加をきっかけに、長期の交換留学や海外進学に関心を持つ学生も現れており、今年度参加した7名のうち2名はすでに長期交換留学を見据えている。また、北アリゾナ大学側からも、山口大学に派遣予定の北アリゾナ大学の学生が現地で友人を得たことで渡航への不安が軽減され、期待を持って準備を進めているというフィードバックがあった。このように、両大学の交流が学生の将来的な行動に好影響を与えていることから、本プログラムを

単なる短期研修にとどめず、中長期的な国際交流の基盤として活用していく視点が求められる。

6 おわりに

今回の共創教育プログラムは、学生にとって語学力の向上だけでなく、異文化理解、自律性の向上、将来の海外留学への動機づけという多面的な意義を持つ機会となった。特に北アリゾナ大学の IGP の学生や日本語学科との連携、グランドキャニオンやセドナなどでの現地体験を通じ、日常的な英語使用環境と多様な文化に触れる貴重な経験を提供することができた。他方で、随行者の確保、実施時期の調整、費用、授業構成の最適化など、制度的・実務的な課題も明らかになった。これらの課題は、プログラムの今後の継続性と拡充に向けて丁寧に取り組むべき重要な論点であるといえる。本プログラムを単なる短期研修にとどめることなく、長期交換留学や共創教育プログラムの入り口として位置づけ、今後のグローバル人材育成の柱のひとつとして発展させていきたいと考えている。

謝辞

本共創教育プログラム構築に協議を重ねてきた Jacob Butler 氏 (Assistant Director, Center for International Education, Northern Arizona University), Melinda Marquardt 氏 (Coordinator Sr., Interdisciplinary Global Programs, Northern Arizona University) 及び、本共創プログラム構築にご協力いただいた関係者の皆様に感謝申し上げます。